



經典餘師

論語二

三

口 11
2047
3



門口 2.047 3

論語朱熹集註

雍也第六

溪世尊譯

子曰雍也可使南面

雍ハ仲弓の御名也南面ハ南面也

真中ニ向陽徳盛カラスの時ナリ上ニ立ル方ハ正ニ南ニ面テ坐シテ下ハ君の於ヘ拜シ面々北ニ面テ武

士トハウケテ聖人今仲弓の人品を稱シ之ハ實ニ君ニ位備フク南面をゆゑ人ナラズトモ

仲弓問子桑伯子子曰可也簡

ナリ

仲弓ハ聖人の我ニ轍面を許シ之ハ故ニ桑が事ト序

カ行ヒも簡ウテヤ可ト仰ナリ簡トハ身を立テ動

仲弓曰居敬而行簡以臨其民不亦可

可トハ大概ニ

雍也第六
子曰雍也可使南面

仲弓問子桑伯子子曰可也簡

仲弓曰居敬而行簡以臨其民不亦可

子曰まはく赤之
齊適肥馬に乗
輕裘衣之吾聞
之也君子周急
不繼富

原思之幸と為
之粟九百と與
辭

子曰まはく母
以て再が鄰里
黨と與人乎

子仲弓と謂て曰
まはく犂牛之子
駢して且角あり
用ると勿んと欲
雖も山川其諸と
舎や

回ハ其心三月仁
違不其餘ハ則
曰小月に至る已
馬而矣助字

聖人ハ只子華が奢たるを禁めしめて貧を人ハ第一
めぐる救べく富る者ハ法の外益なき事を示し
子曰赤之適齊也乘肥馬衣輕裘吾聞
之也君子周急不繼富

赤ハ子華の名
吾子華が齊へ行
體を見らるゝ肥馬に乗奢る者ハ周
衣服を着る吾聞傳ハ人の困窮急者ハ周
施一富る身分のもの上ハ繼與るものあり
富る者ハ定まりし事を形ゆる負る者ハ
越て與べし今五秉を與ふハ原思爲之宰與之
私とらふ者ハ曾て益あり

粟九百辭 御門人原思ハ操行正し
聖人魯の攝政たりし時下宰とあり

子曰母以與爾鄰里鄉黨乎

母ハ原思の辭退さる事母との仰せなり若再
取むんハ之を再が住むる近鄰の里鄉黨の者へ施し與

隣ハ五家里ハ二十五家郷ハ万二千五百家黨ハ五百家也

○子謂仲弓曰犂牛之子駢且角雖欲

勿用山川其舎諸 仲弓の為人と論
上古 鼓豊の旨道なり其

子ハ舜の聖人あり今仲弓のハ又愚なり雖も仲弓
賢徳世に用る小足たハ當時周の代の法ハ祭に用る
牲ハ赤と用ゆべきと云ハ犂牛なり其子
駢して角ありと云ハ用ゆ欲勿とありと云

○山川の神を祭に駢牛と用ゆ犂ハ黒牛なり駢ハ赤色也

○子曰回也其心三月不違仁其餘則

日月至焉而已矣 仁ハ心の徳私欲なきこと也
回ハ心の徳私欲なきこと也
天道の心も同じ也

季康子問仲由ハ政に從カハ使可與子曰ハハ由ハ果ナリ政に從クハに於テ何ク有ハ

賜ハ政に從カハ使可與曰ハハ賜ハ達ス人政に從クハ小於テ何ク有ハ曰ク求ハ政に從カハ使可與曰ハハ求ハハ藝云ク政に從クハ於テ何ク有ハ

心ハ治物ゆへに動く動ハ誘ハるるものなり動ハ誘ハるるハ難ク顔回ハの如クハ常々心ハ存して仁ハ違ハる三月といふ久きをわりの三月月ハあはれむ其餘ハの流中ハ或ハさかすかる日とさかすたる月ハの隔ありて心付とさハかくの如ク工夫ハも至而已とぞ

○季康子問仲由可使從政也與子曰由也果於從政乎何有曰賜也可使從政也與曰賜也達於從政乎何有曰求也可使從政也與曰求也藝於從政乎何有ハ魚目ハの大夫季康子此之人を政務ハの用人とぞ由と政務ハの從使して何んやと云々御對左の通ハ果とハと云々と訓て早く事ハの是決斷の埒ハ有ハと云々

季氏閔子騫を費の宰と為使閔子騫の曰ク善我為ハ辭セよ如我を復ハする者有ハ則ハハ吾必ハ汶の上ハ小在ハ焉ハ矣ハ

○季氏使閔子騫為費宰閔子騫曰善為我辭焉如有復我者則吾必在汶上矣ハ子騫ハ顔淵ハの弟也徳行の名あり御人なり時ハ魯の大夫季氏ハの徳を尊ハと云ハ城下費ハといハ所の宰ハにささんと使者を以て之を招く然るに使者に答ふハ我決して出て事の意なりと云ハ我ハの如くして此事を辭退りて下ハさるべし如復我を招ハめらる事有ハ吾家を擲て身を隠しハ齊の汶水ハといハ川のよりを去るべしと云季氏ハの如ク不忠の人ハの富貴を欲せども其國ハに居て權門ハの對ハまるといハ其詞の直なる事かハの如く

子子夏に謂て曰

まはく女君子の儒
と為小人の儒と為
と無

子游武城の宰と為

子曰まはく女人を
得る乎曰く澹
臺滅明なる者有
行は徑小由不公事
に非ざる未嘗
て偃之室に至る

かろし厚志ざりて字ものハその智のゆへに至処のそとを
ろくど大学より比よのづかしく義に當ると好んで之を
為し其事の終る事ハたりのなりと

○子謂子夏曰女為君子儒無為小人

儒 學者を凡て儒とりの儒ハもことごとく訓て身を
聖人の道よむこととの義なりと君子の學小
人の學として外に分かれ君子ハ己が身の為ふことなる
操行を正し義理を尊なり小人の學ハ人よりわたりて
為を好む比よの利を貪りて
名を好む比よの利欲より出ず

○子游為武城宰子曰女得人焉爾乎

曰有澹臺滅明者行不由徑非公事

未嘗至於偃之室也

らるるトハ武城の地を治ると曰然し下を治るハ徳有
人をも引挙て用るに如かり女賢人を得る焉再乎と
對て曰く鎮分よ氏を澹臺と名を滅明とらる人
あり常に道を行はるるに徑を由らざる事の内意
とを以て見ると時ハ君子松がたの氣象
此を以て見ると時ハ君子松がたの氣象

○子曰孟之反不伐奔而殿將入門策

其馬曰非敢後也馬不進也

孟之反ハ魯の大夫なり功は伐ぬ人物として聖人之
のよ一比魚目の人數戰敗し時孟之反人數をもよめ殿守
をせりして毎事に城内へ引こま殿とハ跡へ引下さひ
とさる敵を防て此がの人數を毎事に引こま武
邊場數の人なりてハ難と時此軍子反殿をははる
毎事よ味方を入終る後より城門へ入る時策を以て曰く

孟之反伐不奔而
而して殿將入
門策を將其馬に
策して曰く敢て後
をらに非ざるか
馬進ま不也

祝鮀之佞有不可
末朝之美有不可
難乎今之世也免

誰能出於戶
由不何也斯道
由莫

質文之勝則
野文質之勝
則史文質之勝
彬彬然君子

人之生也直罔之
生也幸而免

之者知者
好者加不
好者加不
者小如不

此馬駭くして進まむと己おのれと得えむとて殿みやを

○子曰不有祝鮀之佞而有宋朝之美
難乎免於今之世矣當時世也とる免角諛諂を以て務とる事と嘆

○子曰誰能出不由戶何莫由斯道也人道を離てハ戸時を濟べうとたハ家の戸の如誰人ても家と出入するハ戸由せぬのなり然何故此道に由る多や

○子曰質勝文則野文勝質則史文質
彬彬然後君子山奥戸田舎の者ハ質付のやりに生るゆ正直朴一偏して野と

○子曰人之生也直罔之生也幸而免人の世は毎事小生て居仕とらハ正直たつがゆへなり本天道ハ直なる事を好むの今道は背とる者の毎事幸ハ厄と命とを免むとら者なり必竟

○子曰知之者不如好之者好之者不
如樂之者人之道を學ぶてハ有可らざる然るは深く道を好む心を用とら者小如たつと道とを

○子曰人之生也直罔之生也幸而免人の世は毎事小生て居仕とらハ正直たつがゆへなり本天道ハ直なる事を好むの今道は背とる者の毎事幸ハ厄と命とを免むとら者なり必竟

○子曰知之者不如好之者好之者不
如樂之者人之道を學ぶてハ有可らざる然るは深く道を好む心を用とら者小如たつと道とを

○子曰知之者不如好之者好之者不
如樂之者人之道を學ぶてハ有可らざる然るは深く道を好む心を用とら者小如たつと道とを

○子曰知之者不如好之者好之者不
如樂之者人之道を學ぶてハ有可らざる然るは深く道を好む心を用とら者小如たつと道とを

中人以上ハ以上
を語可一中人以
下ハ以上を語
可一不

樊遲知を問子曰
まはく民の義を
務い鬼神を敬
て之と遠ざく知
り可一仁を問
曰まはく仁者ハ難
を先にし得
後よと仁と謂可

知者ハ水と樂し
仁者ハ山と樂し
知者ハ動く仁者ハ
静なり知者ハ樂
い仁者ハ壽なり

○子曰中人以上可以語上也中人以下不可以語上也

先智ありて中より以上の人物ハ打上る事ハ語ハ
なるとして可なり中より以下の者に打上る語ハ
為不可なり唯耳小入ざるのこたうして却て詭を得
事なり和歌ハ我ハ齊と人ハなりとバハ是なり

○樊遲問知子曰務民之義敬鬼神而

遠之可謂知矣問仁曰仁者先難而後

獲可謂仁矣

樊遲知と仁との二ツを問奉り
御答知とりの者ハ民の義を務めたる
義と宜と相通ざるなり人ハ行て宜とを務めたる
臣たる者ハ忠を務めたる者ハ孝を務めたる家業を
大切と務め時ハころハ悔となし心の悔とりの事ハ
皆始と務めとして急と依てなり心ハ悔とゆへ

神鬼を弄玩けらるる然るに人の義を務めて
心悔段ハ鬼神ハ立よるとりハ皆惑たり鬼神ハ敬
を以て道として押進ぶるは是を遠之と云ふなり
仁とハ各人の行を尽す道とを務めたる顔たるハ
悪し而して其報ある事ハ自然と律べし私心あり道
よありと此事ハ易ふありと故ハ難を先に行ひ
是聖人天下を仁の心此の如し是を仁と謂

○子曰知者樂水仁者樂山知者動仁

者靜知者樂仁者壽

流如さゆへ水よ比せ依て水を好むハ知ハ常
動くなり又知あるが故ハ若しも依て動く樂も
仁者ハ仁ハ本心を得て義理ハ一身と安
付大いして重く故ハ山よ比せ依て山を樂むハ

仁者ハ心を安んずるがゆへ静なり仁者ハ知を説くこと
心を煩さるゆへ命壽とハらなり

子曰まはく齊一
變して魯一
變して道に至
る

觚觚ならず不觚
哉

至る

○子曰齊一變至於魯魯一變至於道

此時天下の風俗衰然とも齊魯の二國ハ聖人の後にして
他の國は異なりとも齊の國ハ大公望の後にして
大賢の人なかりとも戦伐法令の武威殘るは桓公
覇者となりて武威政道の風俗殘るは故に粗して人情
を背きて魯ハ聖人周公の後にして礼を重し信義
を崇し故に風俗徳を好し兩方共よ今ハ國風破るは
右の記ゆへ他の國風とハ異なり齊一變能方よ變るハ
魚目の如くならず魚目よここ一變るハ右の如く道に至るべしと
○子曰觚不觚觚哉觚哉
觚とらへる名の不觚あれども其形よほど違は變して今ハ
觚ハ稜なり此ハ觚とらへる實ハ不觚たよハ君臣
父子の名ありとも君ハ不明臣ハ不忠父ハ不慈子ハ不孝
かゝらざれ君臣父子とらへるよありとも今ハ觚を以て

宰我问曰仁

者之告之井
仁有と曰と雖
其之從人や子
曰まはく何為ぞ
其然らん君子ハ
逝しむ可し陷る
可し不欺く可し
罔可し不

君子ハ博く文を
學んで之を約するに
礼を以てさ亦以て

豈觚とらへるの理
あらん哉とらへる

○宰我问曰仁者雖告之曰井有仁焉
其從之也子曰何為其然也君子可逝
也不可陷也可欺也不可罔也

宰我學を告むと未厚うらむ故に心に思ひ仁を為し
身の害を免る事も有りと此問なり雖ハ仁者
向て只今隱は井の中へ仁落ると告ハ如何けんや惻隱の
心強ゆへは續て助人と其中へ跡を遺しては如何
御答何為し其然らんや固より君子ハ理を正し明い
最とも人を仁と強ゆへ其場処までハ到る中くその
中へ欺るは陷入とハありとも只理のある事ハ其言を
信じては罔よさやかと押拵ハ成すこと

○子曰君子博學於文約之以禮亦可

畔り弗可夫矣

以弗畔矣夫

君子ハ先学て博く学て文書よ浅て其肝要の終ち多きハ一ツも益なく却て人より高き誇るべし故ゆへ之を約し心を以てさるるなり

聖人の道德より畔る可き礼とハ規矩の事りて法なり大とハ儒者國家の政道を論むれども却て一家と治め

己が身を安むる事なきと同一是四子六経諸家の高と論を讀覺ても我身の分を知らざりて自身生得し

たうき知恵ハ如何ともなりがたのなるし浅見先生られをり

○子見南子。子路不説。夫子矢之曰。予

所否者天厭之。夫厭之

南子と云ふハ衛の君の夫人也。子路大い説むを依て聖人失て曰く人たよく善なりとも我正くハ何ぞ人より與ふべけんや我りく不止

予ハ即ち上天より我を厭ふべし豈人を待んやとのふ

子南子と見子路説不夫子之小失て曰まはく予が否ともる所の者天之所を厭ん天之所を厭ん

中庸之徳為其至

久矣

○子曰中庸之為徳也其至矣乎民鮮

久矣

人の法と可為を中庸といふ中とハ天地の理りて常と訓て平生の常りて異なりと心の心なり物の偏

下の正しと道中庸ハ徳の至なる乎久しく世の風俗を以て以来

守者鮮とを

○子貢曰如有博施於民而能濟衆何

如可謂仁乎子曰何事於仁必也聖乎

堯舜其猶病諸

子貢曰く如博く民小施して能衆を濟すと有ハ何如仁と謂可乎子曰まはく何を仁と事とせん必也聖乎堯舜も其猶病人諸

夫仁者己也立己
欲して人を立己を
達さんと欲して人を
達さんと

能近く譬と取を
仁の方と謂可己
述而弟七
子曰まはく述て作
不信して古と好む
竊に我老彭と
比す

黙して之を識
学で厭ふ人と誨
て倦不何を我
有とせん哉

徳を俗不学と講
て不義を聞て徒
と能ハ不善を

猶不足なすやう能衆を海に仁徳と謂可や
御答是程の廣大なる事ハ中く仁ととるべきは是
必と聖人の大徳なり右の聖人堯帝舜帝にして此
事の御心を勞しめんと中心博く施し能衆と
り事成難う人の聖人の猶常と
ころの病と思召たうん諸
夫仁者己

欲立而立人己欲達而達人
仁者のころハ
なるとバ己が

身と立と欲バ先人立ちべさやう己がころを達さんと
と欲ハ鬼うく先人を達せしめんと己が心を以て人
及まを仁の
能近取譬可謂仁之方也已
仁の方
右の外に能己が心を以て
人の心は譬へや及まを仁の方也己

述而第七

子曰述而不作信好古竊比於我老彭

道ととる者ハ私よ作為なる事ハ事ハあはれ比
是古へ大聖の御方天地の鬼神陰陽の道を法と
自作の制作ありし御詞なり吾今古の道を述而の
人ハ古への道を尊と好て聖人の道を世の中へ述傳
人なり依て自己の仰も深く身を退めて手前
も竊此人の心比す我國我郷
我の字ハ親とてをなりの詞なり

子曰默而識之學而不厭誨人不倦

何有於我哉
黙して言不して心得悟事とバ
知者ハ往來

坐卧も右の道をして少くも厭ふと
仁者ハ人よ教施しめて心のゆる倦もせん
此二つの行吾如者ハ何し
有とせん哉

子曰徳之不脩學之不講聞義不能

教の至る事なりと云う。束脩とは、始て来る時の進物なり。至て軽薄なるふたと云ふ。束脩を行来入門と云唱。以上の人ハ吾嘗より。誨むことの毎事ありと云。束脩ハ脩するふくを束のるりのなり。

子曰不憤不啟不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也

教する先引と張失をその身を正して心を持つてハ師のゆりゆる所なり。もこの的に向て機変を用ふる学者の手續ありと云。憤とハ學術の工夫於て心ハ大方に通じざるも今少しいつやして得ざるを師する者

是を啟くならず悱とハ自己の心り合点しざるを思ふこと。迷くとして言達らぬ位を師より其理を發し

隅有と云と悱反と云程よりなるふしてハ重て説くも益

五ゆへも則ら復せんと仰せらるなり。

○子食於有喪者之側未嘗飽也

聖人常より親の喪有者に出入合その側相伴するなり。時ハ其人の哀と云。嘗も食を其飽と云ハさき

子於是日哭則不歌

聖人喪ある家より哭むその日に於てハ其哀情を忘るるで歌のふとかならざり。

○子謂顏淵曰用之則行舍之則藏惟

我與爾有是夫

顏淵へ御物語ハ今も奉用。用ひらるれば藏して道を樂べ。此事ハ子路曰子

行三軍則誰與

文徳の於てハ然るなり。若し軍を以て雌雄を争ひ戦ひのふの一事は於てハ誰より與らざるやと三軍とハ

憤不バ啟不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也

子曰不憤不啟不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也

子食於有喪者之側未嘗飽也

子於是日哭則不歌

子謂顏淵曰用之則行舍之則藏惟我與爾有是夫

子路曰子三軍則誰與

與と云

戰誠は國家の人民の安危よからる事なるを最くも大事とすべし。疾は人を擲て為すのよてなれども、多くハ身を謹むるに起る。孝子も都豈慎まらんや。

○子在齊聞韶三月不知肉味曰不圖

為樂之至於斯也 聖人齊の國に在りて時舞の作らるる韶の樂を聞て前述が如く舞

帝の明德大備を以て其大徳を善盡し、誠は百歳の下より禮樂を以て其大徳を知り堪るる聖人

あまりの感づかぬ三月、魚肉等食事の味を覺ゆるを依て曰く舞の樂の斯まで至るとハ不圖とぞ

○冉有曰夫子為衛君乎子貢曰諾吾

將問之 此時聖人衛に居りて冉有の心は衛の君ハ無道

御意ハ衛の味方とすと思召しや如何と子貢の問たり依て子貢諾とありて吾將は試問とならん

元衛の靈公の代は蒧子蒧賈を逐出して孫の輒を立て國を讓りて蒧賈ハ輒の親なり今我代とならん

父の蒧賈を國へ入んとする時の乱るる國の晋ハ蒧賈を國へ入んとする時の乱るる國の晋ハ

入曰伯夷叔齊何人也曰古之賢人也

曰怨乎曰求仁而得仁又何怨出曰夫

子不為也 先古の伯夷が事を向史記に伯夷叔齊

の兄弟ハ孤竹城の君の子なり兄を伯夷といふその父死去するに及び叔齊を愛して是は跡を讓るの遺言なり元來伯夷ハ孝にして父の命を重し身を退くと欲ま弟の叔齊ハ天道の常人倫の道たるハ兄を

世は賢人と思ひて我此に在てハ不可らんとして身を隱し遂に兄弟ともに出去り子貢是事と以て

可て曰く伯夷叔齊兄弟之行如何御答如此の人して古之賢人なり子貢まて曰く二人とも父の命を怨るの

入て曰く伯夷叔齊ハ何人ぞ曰まは古之賢人也曰く怨之賢人也曰く怨る乎曰まは仁を求て仁を得ると又何と怨ん出て曰く夫子為不

子曰マ「マ飯マ疏マ食マ」

飲マ水マ飲マ肱マ而マ枕マ之マ樂マ亦マ

在マ其マ中マ矣マ不マ義マ而マ富マ且マ貴マ於マ我マ如マ浮マ雲マ

之マ如マ一マ」

我マ以マ易マ之マ學マ以マ大マ者マ過マ焉マ可マ

卒マ之マ字マのマあマやマまマるマ

子マのマ雅マ言マ一マのマあマやマまマるマ

所マハマ詩マ書マ執マ禮マ皆マ雅マ言マ也マ

本文の五十の二字ハ

卒の字のあやまると

子の雅言一のあやまると

所ハ詩書執禮皆雅言也

葉公孔子を子路

小問子路對不

葉公孔子を子路

小問子路對不

心ならずや御答小何ぞ怨とらふ事あらん何れ仁の明か
かたも場をを行ひ得らるる子貢心はあらず聖人必ぞ
輒マ如マ不マ孝マのマ人マハマ與マ一マのマあマやマまマるマ

○子曰飯疏食飲水曲肱而枕之樂亦

在其中矣不義而富且貴於我如浮雲

此段聖人義理の重きことを示し疏なる食物を食ふと
かゝる水を飲むのとさへ肱を曲て枕とさるるか不自由

有マのマとマまマれマバマ毎マ日マ如マくマたマらマうマ

○子曰加我數年五十以學易可以無

大過矣マ聖人といふも易ハ躬中をめぐらむる事
此時聖人已七十小進し願はくハ今

年數を歴て此道は心を尽し學をなすバたとし知
得と能ハ不とも大なる過失毎よりさでハあらんとの

とて今世は僅にちをぐる物を計りて是等の事ハ生
以て自己易は通じると思ひて是等の事ハ生

の事と定めりらんとさる愚者として

實は易を徹らるりのなり

○子所雅言詩書執禮皆雅言也

聖人の雅言詩書經ハ國家政道の法式と禮ハ

高き下を尊卑各その且と小葉の道理と并智

所なるを皆人の常は執守る事として是は口の

あはれ言也

○葉公問孔子於子路子路不對

葉公ハ林之國葉とらふ所の一縣の尹たり自己僭上
して公とらひたり聖人の人為を知らざり

論語

葉公問孔子於子路子路不對

子曰まはく女奚
曰不其人為憤
發して食を忘る
樂んで以て憂を
忘る老之將一至今
將を不知と云と再

我生て之を
非む古へと好
敏にして以て之を
求る者也

子怪力乱神と語
不

三人行へハ必
有其善者
之に従へハ其善
不者ハ之を改む

天徳を予
桓魋其予を如何

論語

故一子路への問かき子路對ちかくハ子曰女奚
誠一聖人の大徳詠述がごとく故なり

不曰其為人也發憤忘食樂以忘憂不

知老之將至云爾聖人之志を聞召のひて子路へ
仰せハ葉公吾事を問

女奚ゆふ有の倦を以て對曰さうして自説て曰
吾人為ハ常一天地の道をたのしむ志を厲一若

其理を得ざる時ハ憤を發して食事をし忘る心一
得る時ハ樂み小かくして心憂たりハ事をしむか

の如して年の老とを不知れ吾
常なり奚ゆふ再ハ云ざる

子曰我非生而知之者好古敏以求

之者也聖人の言人々吾を生て
して天地古今の事一通り知ることと

中く左ハ非む我古昔の大道を好む敏一子て以て
心求るなり

聖人りて生たるなり知所の物ハ義理なり
物の名等ハたさるる學とちなりてさうある理なり

子不語怪力亂神聖人常一此四ツの事を
物語らざる其一條ハ一切

奇妙不思議なる怪と事やハ身の徳をハ倍ざりて勇
氣のうはさるる諺と或ハ世の盛衰りの能ハあつる

めとちやくハ一切神仏の事等一此四ツハ疑を
しごとく直り益のなかるる物故りかくハ有せのひし

子曰三人行必有我師焉擇其善者

而從之其不善者而改之凡そ學問ハ善事
を見ても學問ハ善事

事と願ひ不賢なる事を見てもハ吾身を皆めて慎む
べし凡そ三人よりて道を學びり二人の説の附合

從べし則ち吾師也吾師なりと改て宜し
不善とハうらうらと改て宜し

子曰天生德於予桓魋其如予何

王陽明集注

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

桓魋とて、悪人あり、聖人を害し、奉らんとして、その時の御詞なく、邪正とを害さるることあり、夫れを天元ト如何し、專ニに徳を與フの如ク、桓魋の如ク、道ノ逆ル者

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

爾吾無行而不與二三子者是丘也

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク二三子ト以テ我ノ為シ隱ニ乎ト吾レ無ク隱ニ乎ト

子曰ト曰ハク聖人吾不得而見之矣得見君

子曰ト曰ハク聖人吾不得而見之矣得見君

子曰ト曰ハク聖人吾不得而見之矣得見君

子曰ト曰ハク聖人吾不得而見之矣得見君

子曰ト曰ハク聖人吾不得而見之矣得見君

有と

子釣して綱せ不
弋して宿と射不

網ハつる之綱を引
て綱をこらう其
場所をまらうて
取つて物をまらう

論語二
為内なる物なく虚を事をバ盈くたるを為
心約く苦めるとを素わくとを為とまらう類の人ハ恒に
操を失はむとハチ難し

子釣而不綱弋不射宿

聖人の御致年の時家貧なり其時孝養と神
祭の事より付てハ心より己をを得るハ釣とやとの
ニッを遊されて魚肉の用を足らざる然き魚を釣ハ
死を送るを待てとらゆのゆに必しざるの事
種を忍ぶる綱ハとらざる宿鳥としてりや樹木は留
以て鳥をばとらざる宿鳥としてりや樹木は留
竊する鳥をとりぬる事ハさるる事ハさるる事ハさるる
此段心を脩謹であらうとて廣く見ると魚肉ハ世
界是非に用ゆる物なり夫は解てゆく仁者の本心
を用る段ふらく感心をばとらざる宿鳥としてりや樹木は留
仁愛の如く仁愛の如く仁愛の如く仁愛の如く仁愛の如く

蓋し知して之を
作者有ん我は是
無多く聞て其善
者を擇り而して
之に従がは多く見
て之を識ハ知之
次也

互郷與言難し
童子見ゆ門人惑

其進を與も其退
と與も唯何ぞ

○子曰蓋有不知而作之者我無是也
多聞擇其善者而從之
多見而識之知
之次也
聖人身を卑めてゆく謙讓の道
作爲する者あり我決して是なり我多く明智の人の
地へを聞それを參へ考て其善者を選りて之を正しく
擇見て其善者を選りて之を正しく擇見て其善者を選りて之を正しく

互郷難與言童子見門人惑

互郷とらる郷の風儀ハ性悪く與言語交の出来ぬ
人柄なり然る小今童子一人聖人へ謁見願ひたり
小早速御逢あり倣て子曰與其進也不與

甚くして人己を
潔くして以て
進み其潔きと
與ふ其往と保不

子曰まはく仁遠
く哉我仁を
欲まれハ斯仁
至

陳司敗問昭公礼
を知乎孔子曰ま
はく礼を知
孔子退く巫馬期
を揖して之と進
て曰く
吾聞君子ハ黨不
と君子も亦黨
乎君呉も取同
姓るが為よ之と
呉孟子と謂君よ
して礼を知孰
礼を知不人

其退也唯何甚人潔己以進與其潔也
不保其往也往を物とりあつてのハ往ゆさう事を
咎べうと今迄あしくともを

改めし道進バ其志の與ふとさかり其退くふ
與ふ事なり物事唯其甚しハ何しよらんや
誰人よし己が心を潔くし進み來バその潔き所
を往るを與ふとさかり往行さうとをさうとさう
保らざるを仰らう

○子曰仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣

心ハ動さず中を散やさし人々心とをさうまはる事なく
欲ふ動ゆへ道理を踏と能はざるなり仁ハ本心の全
徳なり人々を求むること難しよらるる聖人曰まはく
仁の徳何し遠方よ在のとして求め難しとさうや
我仁を求んと欲ハ
早速斯へ出來ると矣

○陳司敗問昭公知禮乎孔子曰知禮

陳の國りて司敗とて魯の司敗名ハ分明たうと魯
の君昭公の事を取主人へ問奉らうと昭公ハ礼を
知らうと御答ハ取主人
吾國を重むるの至なり

孔子退揖巫馬期而
進之曰御人巫馬期は拜揖あつてまはくと進め

吾聞君子不黨君子亦黨乎君取

於呉爲同姓謂之呉孟子君而知禮孰

不知禮司敗の詞は吾兼て聞し君子ハ周く

不義なり魯の昭公をさう礼をさう其具肩あると
見てハ君子も亦黨しとさう元魯と呉とハ同姓の血脈
をさうとさう然るに魯の君呉より妻取のして姫

巫馬期以て告子曰
まはく丘幸ハひま
苟くも過ち有ハ
人必之を知る

子人與歌て善バ
必之之と反之使
而して後之と和之

文ハ吾人の猶と莫ハ
躬君子と行まハ
則ハ五末之之を

得と有未

若聖と仁與ハ則
ハ五口豈敢てせん
抑く之を為て
厭不人を誨て
倦不則ハ再云と
謂可已公西華曰
正唯弟子學と
能不

姓を各來てハ目よめゆへは姫をやめ呉孟子と唱て
子姓のやうな耳をなかりやうり
照公をとも礼を知
礼を不知者は
巫馬期以告子曰丘也幸苟
有過人必知之
巫馬期も答ふて能くして聖人へ
答ふ誠ハ吾過りて有ん凡て過り者多ハ知ぬ
勝りて通るゆへ改むりてをなす我ハ幸なる者
過らあまバ人より知りて告ふてをなす
仰せりや
子與人歌而善必使反之而後和之

聖人常の御挙動を見とて記さ誠ハ聖人の御氣
象從容ハ狼心たる處を見とて聖人人と與て歌て
和り面白善と思召とて今一反反さ使て後より
和りのふとたり
子曰文莫吾猶人也躬行君子則吾

未之有得

此聖人謙退の御詞
樂の文をりり自う宣ハ口ハ詩
書をも説或ハ禮樂及てハ吾他人の猶く莫とら
心ハ其場へも行べりてやうなるや吾躬君子乃
行かむを行とハ誠
得るもの有未とぞ

子曰若聖與仁則吾豈敢抑為之不

厭誨人不倦則可謂云爾已矣公西華

曰正唯弟子不能學也

仁の道との若ハ及もたうことか
や唯吾行所ハ抑右の道を為て心ハ厭と少しも
たう人ハ教及して倦
さうと云も謂可已矣公西華さうく感嘆して此ニテ余
中く弟子の學で得ることならばとや
誠ハ聖人の大徳
仁心の至たり

子の疾病あり子路禱うんと諸子曰まはく有諸子路對て曰く之有誅小曰く再を上下の神祇に禱子曰まはく丘之禱と久矣

○子疾病子路請禱子曰有諸子路對曰有之誅曰禱爾于上下神祇子曰丘之禱久矣

此の時聖人御不例りて疾少く病快然を禱と申して聖人へ請ひて聖人の仰せ小さく事の故實有諸となり子路對てりてまはく古の誅の詞の中より平生の罪を懺悔し再が疾を上神下祇に禱との詞あは古來より述奉る然り聖人子路に御祇謝あて仰せあるはりや罪を懺解して神祇に禱との事なれば我己に禱をなせし事なれ今日追久矣問のり置て先その儀は及ぶることなれ此段子路ありは聖人を大切と思ひ奉りし聖人の御意に達せしや夫聖人の徳天地と齊く心廣大くして言ハ法となり動ハ人の則となり元より行の欠く事なれ何ぞ禱と事あるんや神聖人一致して目よ見を聖人といひ見可めぬを神と

奢ハ則ハ不孫多儉者ハ則ハ固

り何人も人の測るべし者ありき

奢ハ則ハ不孫多儉者ハ則ハ固

○子曰奢者則不孫儉則固與其不孫也

奢ハ則ハ不孫多儉者ハ則ハ固

寧固者ハ極て舉動固しきものなり何れ中庸なり病なり然れども一方を過るなり其不孫身持を為與ハ寧より固より身を過るなり勝と仰せ

君子坦蕩蕩小人長戚戚

東照神廟の御詞より身の程を五字仰らん上を見よの仰あり世は是を五字七字の御教と傳へ待ら

君子坦蕩蕩小人長戚戚

○子曰君子坦蕩蕩小人長戚戚

君子坦蕩蕩小人長戚戚

上は君子の徳有るハ自然り容貌の見受楫違ありのなり坦とハ地とやのなり湯とハ長く廣くゆるゆる又行つる小人ハ長く戚々として心せし

○子温而厲威而不猛恭而安

子温こゝろ小こして厲こ威いままして猛たけく不な恭こ小こして安やすい

此章ハ御門人衆常ニ聖人の御挙軼容貌を見受奉りてかくハ書載たりん聖人の御氣象温和

決斷果し易く同は髪を入むるを厲とす然も物の

光くようちゆう御權威ありて却て猛く怒く布風を

見奉りて人々之恭敬をほくし之を却て人も

泰伯第八

子曰泰伯其可謂至徳也已矣三以天

下讓民無得而稱焉此段心を潜て見べきま

天朝の道は合ををいふ泰伯ハ周の大王子の適子

泰伯弟八

子曰まはく泰伯ハ

其至徳と謂可已

三たび天下を以て

讓る民得て稱

の二を保服せしめり文王の子武王に至りて遂に殷

の紂王の悪逆無道なるを除去して天下を取りて大徳

仁聖なりて最も武王に至りて死民の苦を救ひて天

下の為に己と得て天下の主となりて死民を

仰ぎ尊む仁君なりと子細ハ最初大王の時殷を除の志

あり然も小泰伯の心は既に君を討てて

従ハば遂に身を避て跡を隠し以上三たび國を讓

て世の帝王と断り四人は皆大徳賢明のが

至徳なりと仰らる是を天下の人より落し稱美あり

るの至徳とハ聖徳至極上なるをいふ右大王ハ賢

人なり文王武王元より人の知る処然も未だ何事も

なから大王の時己は殷を討めし志が少く後世の辰を

天地上下君臣尊卑の義理なり。其何の道も
ちて。天朝の中華西夷の上る事ハ此の外ならず
ざるを以て

子曰まほしく恭にして
礼毎をバ則ち勞を
慎で礼毎をバ則ち
ら慙勇小して礼
毎をバ則ち乱直
にして礼毎をバ則
ち絞

君子親を篤れば
則ち民仁を興
故舊遺不バ則ち

子曰恭而無禮則勞慎而無禮則慙
勇而無禮則亂直而無禮則絞

禮ハ物を正一人道の過るを及ぶ程
しむた人バ人を恭するハよりと
則ち心勞なり。慎むとを知らざれば
のち慙なり。勇氣を好で礼を知らざれば極
場所を弁するを狼藉なり。正直にして古馴
礼を知りて極して何事も猶豫なく物をさ
る。多し。窮屈なり。右の四ヶ条を以て礼の
君子篤於親則民興於仁故舊不遺則

民偷不

民不偷 上の人の父母は敬を以て
弟の間睦く下なる者を惠む交るを欠

驚し。然る時ハ下民も仁に感ず義理の心
其興を遺るハ民に迫る人情あり心の信
偷る

曾子疾有門弟
子と口で曰く予
足を啟け予が手
啟け詩云く戦
戦兢兢として深
淵に臨む如く薄
氷を履か如し今
もして後吾免る
と知夫小子

曾子有疾召門弟子曰啟予足啟
予手詩云戰戰兢兢如臨深淵如履
薄冰而今而後吾知免夫小子

此段曾子の疾重の時門弟方を招て細く教て
曰く夜を啟き手足を改む。此身ハ是父母より
受得たる大切の身なり。全して死するを孝と
危る父母を思ふ平生懼慎むべし詩經の詞より示

曾子疾有孟敬子之問

曾子曰曰鳥之將死其鳴也哀

君子道也貴乎道者三動

如く戦れ競ひて深淵を臨見が如く薄氷の上を履つて死する事を得

曾子有疾孟敬子問之 曾子の病中曾子の大夫孟敬子

曾子曰鳥之將死其鳴也哀 御話あり夫鳥獸といふのハ

人之將死其言也善 本決のな死の故に死する時節もあつて命終り及で嘆きの

君子所貴乎道者三動 言善事を述べて死する君子の所貴むる道者三動

容貌斯遠暴慢矣正顔色斯近信矣 容貌を遠ざけ暴慢を正し顔色を正せば信

出辭氣斯遠鄙倍矣籩豆之事則有 出辭氣を遠ざけ鄙倍を正せば籩豆の事則有

司存 容顔動舉は暴慢の二ツを遠避べし 暴ハ

弟三辭氣象ハ鄙倍ハ信と信と守ふべし

右の三品ハ身を脩め政事を為すの要なり 籩豆珪

璋等の諸礼器物を持扱はせしめ司存ハ

任す可なり

曾子曰以能問於不能以多問於寡

有若無實若虚犯而不校昔者吾友嘗

從事於斯矣 曾子常言我多能なり

故に我多能なり 故に我多能なり

能なり 故に我多能なり

能なり 故に我多能なり

曾子の曰く以て

六尺之孤を託して

可以て百里之命を

寄可し大節を

臨んで奪可し不

君子之人與君子

の人也

言言二
三十五 王漢真舎齋
たはさかしく實て有るも虚きか如くたると人より我
を觸犯とありとも我ハ直なり彼ハ狂なりと心を
寄て計校するなむくしやハ有るは昔吾友の顔淵の如き事
是毎我のころの行ひなり昔吾友の顔淵の如き事
仰らるし

○曾子曰可以託六尺之孤可以寄百里

之命臨大節而不可奪也君子人與君

子人也

國家の爲に孤子を託し輔佐して下知を司る
假令難義大節なる場は臨し志を屈せしむる
奪ハさむを利し迷はざる君子の人と實に
君子の操行とりて六尺の孤又ハ五尺の童子とりて
その數よめらるる通用して孤子を
り我たり百里と八百里の一國をり

○曾子曰士不可以不弘毅任重而道

遠

仁以為己任不

亦重乎死而後已不亦遠乎

操を堅く守る此段ふく味ふべし

○子曰興於詩

禮於立

禮

禮

論語

玉藻集官職

樂於成

民ハ之由使可
之を知使可

勇と好で分負を
疾ハ乱るる人
て不仁なる之を
疾と已甚きハ乱

也
如周公之才之美
有も驕且吝さる
なく使バ其餘ハ
觀不足不巳

三年學で穀
至不ハ得易
不

篤く信トて學
を好く死を守
て道善を

論語二

成於樂

樂ハ文字の心して

朝之時ハ利欲外物の
為ニ動搖とたり
の事元來天地四方を象
手くも主とも則ち歌謡
而して后は樂和の道用
とあり若礼を以て徒ニ
樂を執弄ハ放蕩ニ流る

子曰民可使由之不可使知之

聖人の天下を治めハ
と説法教化して知使
民齊く治るとなりこれ
所為ハ大量の

子曰好勇疾貧亂也人而不仁疾之

已甚亂也
血氣の勇を出し人
置りしめらぬと外
置りしめらぬと外

子曰如有周公之才之美使驕且吝

其餘不足觀也已
言心ハたとハ周
りて及バも其餘の事ハ

子曰三年學不至於穀不易得也

寄至カク願ハス
徳を美良
得不易とたり

子曰篤信好學守死善道

道を篤く信向
た道善を篤く信向

論語一

三十一

王漢集

危邦不入。亂邦不居。天下有道。則見。無道則隱。

危邦、亂邦、不入、亂邦、不居、天下、有道、則見、無道、則隱。危邦、亂邦、不入、亂邦、不居、天下、有道、則見、無道、則隱。

邦有道。貧且賤。邦無道。富且貴。馬也。駝也。

邦有道、貧且賤、邦無道、富且貴、馬也、駝也。邦有道、貧且賤、邦無道、富且貴、馬也、駝也。

且賤。且貴。且賤。且貴。

且賤、且貴、且賤、且貴。且賤、且貴、且賤、且貴。

其位不在。其政不謀。

其位不在、其政不謀。其位不在、其政不謀。

師執事之始。關雎之亂。洋洋乎盈耳哉。

師執事之始、關雎之亂、洋洋乎盈耳哉。師執事之始、關雎之亂、洋洋乎盈耳哉。

狂而不直。侗而不學。不慥慥而信。

狂而不直、侗而不學、不慥慥而信。狂而不直、侗而不學、不慥慥而信。

知不知。吾之不知。

知不知、吾之不知。知不知、吾之不知。

子曰。狂而不直。侗而不學。不慥慥而信。吾之不知之矣。

高驕ここうきょう、知恵ちゑ自慢じまん、我われ終つひたる者もの、其その上うへ愿ねがはく物もの、其そのの受うけ入いり、ハ聖人せいじんも致いたす方かたのあ、をさうし、吾われも愉たのしむを、知ち不ふと仰おほせ

学がくハ及およば不たが如ごとく、猶なほ之これを失うたうを恐おそむ

山さん魏ぎ乎や舜しん禹う之の天てん下かを有あり而しかして與あら不た

○子曰しよ學がく如ごとく不た及およば猶なほ恐おそむ失う之を之の道みち乃すなはちは可べき為ための心こころ持もつ、其そのの學がく終つひるも是こゝでハ行いふ不た及およば、其そのの失うは、其そのの甚こゝろ惡くと事ことなりと程ちやう子し先せん生せいの言ことなり

○子曰しよ魏ぎ乎や舜しん禹う之の有あり天てん下か也なり而しかして不た與あら馬ま、舜しん帝てい禹う王わう古こ代だい在あり至し德とくを施ほす、其そのの戴たいく所ところ誠まことハ高たか大たい金きん邊へん、禹う王わうの心こころハ天子てんしとて、其そのの與あら、其そのの重おもき

大おほなる哉や堯ぎやう之の君きみ為なる魏ぎ乎や唯ただ天てん大おほなりと為なる唯ただ堯ぎやう之の則すべら蕩たう乎やとて民たみ能よく名なる

居いるのよ、其そのを義ぎ目めとも、其そのの龍りゆうの民たみを憐あはれむ事ことなりと、其そのの龍りゆうの

○子曰しよ大おほ哉や堯ぎやう之の為なる君きみ也なり、魏ぎ乎や唯ただ天てん為なる大おほ唯ただ堯ぎやう則すべら之の蕩たう乎や民たみ無なく能よく名なる馬ま

成功せいこう有あり煥くわん乎や其その文章ぶんしょう有あり

成功せいこう也なり煥くわん乎や其その有あり文章ぶんしょう、誠まことハ聖人せいじんの功こう徳とくを施ほす、煥くわん乎や其その文章ぶんしょう有あり

舜しん臣しん五ご人にん有ありて天てん下か治ちま

○舜しん有あり臣しん五ご人にん而しかして天てん下か治ちま

右みぎの明あき君きみ天てん下かを治ちま、左ひだりの及および民たみ歸かへ服ふく、其そのの平へいを得える、其そのの世よの

武王の曰く予に
乱臣十人有
孔子曰まはく才
難其然不乎唐
虞之際斯は於て
盛なりと為婦人
有九人而已

天下を三分にして
其二を有て殷
は服事を周之徳
に其至徳と謂可
已

時ハ小人の輩つらも勢を得と知るべし是最も弟一の
義なり右舜帝の天下は徳ありしも其下は尚稷
皋陶益等五人の賢人を用ひのちの義なり
始祖 大神天照皇の御宇ハ最も大聖至徳比と云ふ
事なり福とも司く賢徳を用ひのちの徳日光と云ふ
奉つたる凡そ賢臣八百と傳中ハ五賢の内攝政天兒
屋根公を重んじて後世までも三社と稱し天位は
分配しその外天朝並に萬邦共々明君の代はハ
賢人を用ひの事歴代
武王曰予有乱臣

十人 周の武王の為よ世を輔治するの臣十人ありしと
字の亂の字を書きハ誤なり亂の字ハ古
紛らざる者なり
孔子曰才難不其然乎唐
虞之際於斯為盛有婦人焉九人而
已 才難とハ古語なり心ハ世を治るの才徳ハ真小
得難しとの義なり聖人の語を引ぬ誠し

才難と云ふと然たり唐の堯帝より虞の舜帝よ
世を譲りて迄の間才徳の人最も多く盛なりと云ふ周
の代は十人といふ大望周公召公畢公榮公太師太
矢散宜生南宮适など九人のとなり今一人ハ武王の
妾の内よ邑姜とて賢女ありし家の内を
治めり故に之を筆して十人とハヤなり

三分天下有其二以服事殷周之徳其
可謂至徳也已矣 殷の紂王の暴悪論
十國然らば此時文王ハ西伯の位に在りて忠を尽し
才の數く諫めを奉つたる囚ふ就めひその後咎り
國を撫安して謀叛を為しめを天下一人として文王
を戴しぬ者なり殷王を厭惡で文王を天下の主と

てんと稱し大抵の君ハ未歸せざるの内より
世を奪つたるは尚く文王ハ殷の世は屈服して事ひ
分て二分ハ誠し周の御代のどくなり
至徳なりと稱し三分とハ天下を三つ

禹ハ吾間然也
毎飲食ヲ菲シテ
孝ヲ鬼神ニ致シ
衣服ヲ惡シテ美
を蔽冕ヲ致シ
宮室ヲ卑シク
シテカヲ溝洫ニ
及ニテ禹ハ吾間然
也

子罕第九
子罕言利與命與仁與

○子曰禹吾無間然矣。菲飲食而致孝
乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮
室而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。

禹王の大徳也。聖人も間然。先儉を
守りて朝夕の飲食を菲し。先物ハ至
りて祭の礼服黻冕を盡し。常の衣服ハ
惡し。樓閣ハ卑く。荒く布して田畝の溝
洫ヲ入テ後世成其徳沢を蒙る。誠
然。禹王の大徳に於て

子罕第九

子罕言利與命與仁。聖人言示。中
三ヶ条なりと云く。一ハ利と。何
の義理ハ害
あり。二ツハ命と。禍福吉凶定ヤリ。三ツハ仁と。助の理も備
あり。然るも皆心中の至誠による事ゆへ其説長
小知の都説て却て益なりと云く。達巷黨

人曰大哉孔子博學而無所成名
達巷黨と云く。聖人の大徳を以て其才能
稱奉す。誠は博學と云く。然るも何事
一藝ハ名を得るや。是と云く。子聞之謂門
弟子曰吾何執執御乎。執射乎。吾執
御矣。何の執処あるんやと云く。御ハ馬
を御法なり。

達巷黨の人の曰く
大なる哉孔子博
く學で名を成
所を無
子之を聞て門弟
子謂て曰まはく
吾何を執ん御を
執ん乎射を執ん
吾ハ御を執ん

御矣。何の執処あるんやと云く。御ハ馬
を御法なり。

天之將也斯文也
喪人將後死者
者斯文也與
得不天之未也斯
文也喪人匡人
其予也如何

大宰子貢曰固
曰夫子ハ聖者
與何也其多能

子貢曰固天縱之將聖又多能也
天之縱也將也
聖者又又多能
子之能也聞て曰
大宰ハ我
知乎吾少也賤
故ゆへは多く
鄙事を能く君
子多かるん哉多
か不
牢曰く子云ハ
吾試らざる不故
ゆへは藝也

論語二

王より文王に至りて最も高道盛うして郁郁たる文王
既に没して久しく絶えたる今や天より我に
我の事なるは是也 天之將喪斯文也後
死者不得與於斯文也夫之未喪斯文
也匡人其如予何 天より人間の此道と絶え
事あるや 然る後の世に生る者も斯道と云ふを
習知してあへて若天より世界をあはせるといふ人間の
道を絶えざるは匡人の
賢の予を害するもの有らばや

○大宰問於子貢曰天子聖者與何
其多能也 大宰とて官の人聖人の聖徳と
所以を知らずで多能なるを以て聖と
心得しや 子貢の言なる誠なり 夫子ハ
聖人とて思はれて多能なる事のみを

子貢曰固天縱之將聖又多能也

子貢曰固天縱之將聖又多能也
子貢曰固天縱之將聖又多能也
子貢曰固天縱之將聖又多能也

知我乎吾少也賤故多能鄙事君子多
乎哉不多也 聖人聞召て曰ハく大宰ハ誠も能
我を知らざるのなり 吾幼少の時ハ身
侍らざる多能多藝有能を以て君子を評する者ハ

牢曰子云吾不試
故藝 御門人琴牢の語カク我嘗て聖人の云を
聞しも右の如く 聖人とてつら云ハ五回ハ
上へ奉試らざる事のみならず 鄙事を推さざる
その事をも藝ともいふべしと云ふは謙退の御教なり

論語二

玉藻集官職

夫子循循然
以善人誘我
以博我以文
以約我以禮

既吾才竭
立所有卓再
如之之徒
如之之徒
如之之徒

子疾病子
路門人為
臣使

然善誘人博我以文約我以禮
誠也聖人
其妙なる事人をして各其智を達せしめ徳を成就
かゝるに循循然とハ次第ある事なり善誘りて
道徳に入りしむるにハ格を博文を學とて其節
物之理は格を博文を學とて其節
節場あり是を博文を學とて其節
節場あり是を博文を學とて其節

卓爾雖欲從之未由也已
右文を學とて其節
左文を學とて其節
右文を學とて其節
左文を學とて其節

子疾病子路使門人為臣
聖人の御心地
病の間曰久矣哉由之行詐也無
病の間曰久矣哉由之行詐也無

臣而為有臣吾誰欺欺天乎
聖人の病少
此事を聞かして仰せありけるハ子路久し
有るに詐の行をなせしめ其君の徳を俗を

且予其臣之手に
死する與寧寧二
三子之手の死
乎且予縱大たる
葬を得不得
予道路に死
乎

子貢曰く美玉
斯の有價に韞
て蔵せん諸善賈
を求て沽諸子
曰まはく之を沽
哉之を沽ん哉
我ハ賈を待都

なり

子九夷は居んと
欲も或ひの曰く
陋一之を如何子
曰まはく君子之
居何の陋
之有ん

要と臣たる事
べしとありと今我は臣
たり我誰を欺んと
天を欺くといふ
且予與其死於臣
之手也無寧死於
縱不得大葬予死
其手は心は快然
葬を得ざるも義
道路の葬とるも
若し同布の事

○子貢曰有美玉於斯韞匱而藏諸求
善賈而沽諸子曰沽之哉沽之哉我待
賈者也子貢の心は當時世衰へ人暗して聖人

聖人用らるるを惜むこと
卑屈たるを極て世は重
言問奉りたるたも斯は千金の宝玉ありこれを置
韞て秘蔵せん諸善を捨置とも惜む事なきは善賈
を取て沽べし諸とたりとあるは世の宝とたり玉を
以て聖人は擬し聖人御啓元より空く捨置事ハ
益益なり然世の宝は用べし事元來沽べし
理は當る然此方より賈を求るハ賈とりの
者なり向より値を以て求る來る事
待ハ義理は當る事なりと

○子欲居九夷或曰陋如之何子曰君
子居之何陋之有中國の道衰へ世の中淺間
ケ様の事を見し九夷は之て住居せんと欲する
のありたり東が九ツの夷あり然るも或人喻きて
聖人實は九夷は之のありと誤りて夷の國ハ
衽を左にして侏儻として言語鳥獸の如く風俗至て卑

陋如何之... 御谷假令陋く
 とも陋き事へ彼は在て我與らんと小あらむを我ハ唯義
 理の安し道を守とならば何ぞ陋きを擇んんや君
 子の居りし能う他ととらる。儒者九夷の説を以て
 天朝をうごそ又神職者流中華の禮樂を事し毎
 小下しむらも匹夫相佐との詞なり夫 天朝の
 眞は天子の國なり中華の文物義なりとらるとも外國
 を以て比をなるととらると論る

○子曰吾自衛反魯然後樂正雅頌各

得其所 魯の君哀公の即位十一年聖人衛の國
 雅頌の殘ひ缺くを

○子曰出則事公卿入則事父兄喪事

不敢不勉不為酒困何有於我哉

深切の卑を説り内徳を詠ふるを舟のつら外
 りくハ公卿の事して位の貴びを示し内して父母
 小職して孝を尽し喪に臨んで哀を尽し酒に困や死
 を慎むを此條々我よく事有むと何も
 高き行はしめたる日用の
 間深切を示しつらなる

○子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜

此段ハ聖人川の流に對し水の流逝して止まらな
 代不易晝夜の息止たことを御覧ありて深く感嘆

有惜念心なる物其間始てハや終てハや
 始まる只一つの息の滞らな事斯の如く夫との

作かり最も見て見やと説の者ハ水は如く
 誠は天地の道聖人の他人の行い此の外なを讀

者ハやの所最も深く敬して
 その意を味らむ事なり

子川の上は在て曰
 まはく逝者ハ斯の
 如く夫晝夜を舍
 不

吾未と徳を好む
と色を好む如
と者を見未

譬如山を為が如
未一簣と成

未止ハ吾止也
平地の如
覆と雖も進ハ
吾往也

○子曰吾未見好徳如好色者也

人の色を好むと甚しとけりて之を好むと味を好むと耳
の聲を好むの類と云ふ色を好むとけりて心も動かし中
にも最たる目も羨色を好むとけりて心も動かし甚し
くも貧賤なりて身の暇なき者なりても思ひの外なる
事のあること危て然らざる聖人も徳を好む
そのくらの斯の如くなるを見未とのたひ

○子曰譬如為山未成一簣止吾止也

譬如平地雖覆一簣進吾往也

危そかをも用功を成と欲せざる者今一にして志を
退るハ惜む事なりとやたは山を為す今唯一簣の
土を置山成就と云ふを夫を成不ハ惜む事なり
只一簣と云ふ止るも是則ち怠るとらふのそ吾止む
覆るとハ成就と云ふは地を平小する如く只一簣の土を
進むと云ふ成就と云ふは

之を語て憊ら不
者ハ其回與

是吾往進と
りの者なり

○子曰語之而不憊者其回也與

顔子ハ聖人よ進む御人なり 聖人の御するへの語る所
能く心よ解てその功身よ行つたよハ時節の雨を
得て草木の発達茂育と云ふ如く何ぞ憊と云
有やと仰せられ聖人よ其徳を稱するの

○子謂顔淵曰惜乎吾見其進也未見

其止也

退る止を見

○子曰苗而不秀者有矣夫秀而不

實者有矣夫

子顔淵を謂て
曰まハ惜み乎吾
其進むを見未
其止を見未

苗にして秀不者
有夫秀て實不
者有夫

後世畏可なり馬
人を來者之今
如不を知人四十
五十ふして聞と
每ハ斯亦畏るた
足不巳

法語之言ハ能從
がて、毎らん乎之
を改むるを貴と
為異與之言ハ能
説ふて毎らん乎
之を釋ふと貴と

為説ふて釋不
從ふて改め不吾
之を如何と
と未巳

忠信を主とモ巳
小如不者を友と
改むるに憚らるる勿

三軍も帥も奪す
可し匹夫も志し
を奪す可らざる

品ありたるとハ苗の時芽を出るを以て、
實らざる者あり、是を以て、君子
ハ能く勉厲
とと貴らるる也

○子曰後生可畏馬知來者之不如今
也四十五十而無聞焉斯亦不足畏也

巴 後の世より、知者大徳の人より出づるも、計り
後世も徳の秀る人の出づるとして、實らざる也

○子曰法語之言能無從乎改之爲貴
異與之言能無説乎釋之爲貴説而不

○子曰法語之言能無從乎改之爲貴
異與之言能無説乎釋之爲貴説而不

釋從而不改吾未如之何也已矣

法語之言ハ、詞正しく直らざる者、教諫を入らざるを、法
あとの詞ハ受從がハざる者、あらんや然とも之を聞て
忽ち改むるを以て、其を貴と、異與之言ハ、人、逆を
して、其意ハ異與を以て、其を貴と、異與之言ハ、人、逆を
道に、其意ハ異與を以て、其を貴と、異與之言ハ、人、逆を
て、順らざる者、然とも其意の由来を釋、其を以て、
説の、其意ハ異與を以て、其を貴と、異與之言ハ、人、逆を
仕方の、其意ハ異與を以て、其を貴と、異與之言ハ、人、逆を
事とならる

○子曰主忠信母友不如已者過則勿

憚改 右ハ前の學而の

○子曰三軍可奪帥也匹夫不可奪志

知者不惑仁者不憂勇者不懼

與共學可與適道

可與立可與權

唐棣之華偏其反而豈再思室是遠

未之思也夫何遠之有

鄉黨第十

子曰知者不惑仁者不憂勇者不懼

能明者不惑者不憂者不懼

子曰可與共學未可與適道可與適

道未可與立可與立未可與權

唐棣之華偏其反而豈不爾思室是

遠而

也夫何遠之有

子曰未之思也

也夫何遠之有

鄉黨第十

載後世之法備者今此篇之讀

親拜一奉まつらる如く然ども聖人ありて心を寄て斯行なはれをなすはありはあはれども是を聖人大徳の餘光なり

孔子於鄉黨恂恂如也似不能言者

孔子郷黨に於て恂恂如と一言つゝ能不着に似たり

聖人父母の御家にて郷黨の御交りも謙卑遜順を服要として自己の大徳を隠しめり恂恂と信實として成事するの如く其在宗廟朝廷便便言唯謹

其宗廟朝廷に在て便便とて言唯謹し再

爾然ども魚目の宗廟の法式及朝廷の政道に與

以て便便と明白に仰るを唯御自最もふりく謹むる容態にありしとたり

朝與下大夫言侃侃如也與上大夫

朝にして下大夫與言侃侃如と

言聞聞如也

下大夫と上大夫の大夫たる郷大夫たる郷大夫の一族と下

大夫と政務を論じたり時ハ凡てありの直をつとてハで仰せあり上大夫の言聞聞とて和悦を合て應

君在踧踖如也與與如也

朝廷へ出て君御座ある時ハ恭敬表はれしとて踧踖とて事中庸の道にありて與與如とて

君召使擯色勃如也足躩如也

擯伏しつゝの者あり擯ハ我主君の言を伝ふ告介ハ他國の君の言を聞て擯やで傳ふ役なり是兩君の會の時ハ右客對の事なり與與の時ハ勃如とて顔色の正しとて勃として起居振舞の躩如滯りたり

揖所與立左右手衣前後襜如也

上大夫與言ハ言聞聞如と
君在セバ踧踖如と
與與如と
君刀口で擯使ハ色勃如と足躩如と
與立所を揖と
手と左右と衣の前後襜如と

趨進翼如
如
賓退必復命
復命
賓顧不

公門入に鞠躬如
容不が如

立不中門
行國を履不

右擯となして立居をなす時左の人より揖する時
ハ左の手をとりて右の人より揖する時ハ右の手をとりて
よく衣服を着たりて起居趨進翼如進行
物づつ前後を瞻如あり
その時ハ手を胸に當りて臂を
として端く翼如の如くあり
賓退必復命

曰賓不顧矣 主君と他君と兩君相見の禮終
つてその時早く立歸て復命して曰や貴賓跡
をも顧ぎて門出ありと是ハ君の敬恭のころを

紆々
為

○**人公門鞠躬如也如不容**

公の御門に入るとハ假令大なる儀とも恭敬の
御心厚くさるるより自然に御身を屈して出入る
其容貞を鞠躬といふなり
鞠めて我身門に容なくさか如くなくし
立不中門

行不履閭 君の御門より道の真中より行はざらん
中ハ人君の過りの道なり行はざらん鳴居を

履べりてを以て皆陰成の名なり息居といひ水
引といふ類もさるるなり
過位色勃如也足躩如

也其言似不足者 古ハ屏の間に當りて君の
居る時を過行時ハ顔色を正しと勃如と足の

息ハ起居するに言を妄に放べりて君在るとも猶
その道最も重んじ
攝齊升堂鞠躬如也屏氣

似不息者 階を升りて堂
息づらひ推さるハ非禮なり
出降一等

齊を撮りて堂に
升りて鞠躬如く
氣を屏りて息せ
不者に似たり
出降一等と降
顔色を運て怡怡

息づらひ推さるハ非禮なり
出降一等

如階之沒
其位之復也
如也

逞顏色怡怡如也沒階趨翼如也復其位
如也階之沒也君の御目通を過て階を一段下は堂下御視通ある故りたるを君の前の心地と翼如て敬い過る夫より自躬の座席へ返てハを

主之執鞫躬如
上之揖不
下之授

○執主鞫躬如也如不勝上如揖下如
主命主とありてある玉として諸侯より國を分封せらるる時其印は天子より下賜る所然るは聘問と我主君より鄰國の君へ音信の使品を持参する事ありその時右の鞫を我主君の命なり印は持行となりそれを添出する時受り濃りのく君を重んずる事なりこの故に躬を畏

足蹢蹢如
如也

授勃如戰色足蹢蹢如有循
主命主とありてある玉として諸侯より國を分封せらるる時其印は天子より下賜る所然るは聘問と我主君より鄰國の君へ音信の使品を持参する事ありその時右の鞫を我主君の命なり印は持行となりそれを添出する時受り濃りのく君を重んずる事なりこの故に躬を畏

享禮之容色有

享禮有容色
右の通已は君命の言を速畢

私之覲之愉愉

私覲愉愉如也
自の君は目見たり時悦の色面小著り右の聘問の礼法を速教み

君子紺紕以飾

○君子不以紺紕飾
君子の衣服ハ正の

紅紫不以爲褻服
暑小當て袷の
締給必表而出

紅紫不以爲褻服
紅紫色は褻服
暑小當て袷の
締給必表而出

して之を出さ

緇衣ハ麋裘
素衣ハ鹿裘
黄衣ハ狐裘

襲の裘より長
右の袂を短

必らぎ寝衣有
長一身有半

狐貉之厚以居

喪を去て佩不
所ら毎

帷裳ハ非ざら
必む之を殺さ

羔裘玄冠以て

吉月必ら朝
服して朝を

論語二

四十四 玉藻集會篇

之暑気の節ハ下ノ單の衣服を着てその上ハ縹

縹ハ目の鹿の毛にて縹縹の類なり縹衣羔裘

素衣麋裘黄衣狐裘 寒冷の節ハ暖

下ノ暑て上ノその色と異なり物を褌

と褌ハ麋子の裘より服よりハ素色

褌裘長短右袂 聖人襲の御衣ハ長

筆硯何々右の手の使易とあり右のたりとを引あ

必有

寝衣長一身有半 寝衣の衣服あり

狐貉之厚以居 過る長く有るの義なり

去喪無所不佩 事なり時ハ佩

非帷裳必殺之 帷裳ハ朝庭へ

羔裘玄冠不 其外ハ要を裁殺して縫目なり

以弔 右の羔裘并玄冠

月必朝服而朝 衣冠冕裳の服を正して

會の君ハ相見

論語二

四十五 玉藻集會篇

公に祭る肉と宿
不祭肉三日と出
三日と出さ
ハ之を食セ不
食言不
一言不

蔬食菜羹と雖
瓜祭必
らむ齊如さ

席正し不坐
セ不

祭於公不宿肉祭肉不出三日
公の祭を御助め其供
の肉を拜領して歸る其
供物ハ一宿を越えて領食し
三日を出してハ肉の味
三日を出してハ肉の味
三日を出してハ肉の味

言
三日を出してハ肉の味
三日を出してハ肉の味
三日を出してハ肉の味

雖蔬食菜羹瓜祭必齊如也
野菜的羹と瓜祭ハ必
除置て食物祭を始め
人の恩を祭る此丘僧の膳
祭る如し其時ハ敬しく齊
如さ

席不正不坐
席正し不坐
誠し君子の心なり

郷人飲酒杖者出斯出矣
郷人の飲酒杖者出ス
杖者出スハ斯出ス
郷人の儻朝服して阼階に立

朝服而立於阼階
朝服而立於阼階
節分の豆を打出しハ是
と讀極て戯弄し同然
主人ハ東階より賓客ハ西階
より登る

問人於他邦再拜而送之
問人於他邦再拜而送之
拜して之を受日
再拜して之を送
康子茶を饋う

康子饋藥拜而受之曰丘未達不敢
康子饋藥拜而受之曰丘未達不敢
嘗
聖人御不例の時
奉するその時聖人より受納て其

嘗
聖人御不例の時
奉するその時聖人より受納て其

廢焚子朝
退曰曰傷人乎馬
を問不

君食を賜必
を席正して
先之を嘗君腥
を賜必必熟
て之を薦し君
生を賜必らど
之を畜なめ

君待食とる
君祭先飯
疾て君之を視
東首して朝服
加て紳を拖

君命して召セ
加馬を俟不
行
大廟入て事
毎同
朋友死して歸
所ろ毎曰ま
我於て殯
セよ

使者へ答ふや
我病の証并薬能い
故に安に拜し嘗ど其意を拜し其薬を服し
聖人朝廷へ出た跡
御馬室焼失あり故朝を
退出し一歩一歩御問あり
馬を次ぎ問ふ事ども聊の事
のやうやく意味あり然るも是ハ只有し
事とあらべし

廢焚子退朝曰傷人乎不問馬

聖人朝廷へ出た跡
御馬室焼失あり故朝を
退出し一歩一歩御問あり
馬を次ぎ問ふ事ども聊の事
のやうやく意味あり然るも是ハ只有し
事とあらべし

君賜食必正席先嘗之君賜腥必熟

君賜食必正席先嘗之君賜腥必熟
而薦之君賜生必畜之
自躬拜味して餘ハ頌與君君生肉と下さ
時ハ熟整てを御先祖へ薦奉まつる君
生る物と下さ時ハ拜領物を授け
理たるを即ち畜て置べし

君君祭先飯

君君祭先飯
君の側侍食遊と時君ハ
先達て箸を敢て賓客の禮を留めし
疾君

視之東首加朝服拖紳

視之東首加朝服拖紳
朝服衣冠を上へ引掛その上へ紳帯を
腰に引かけ君逢りたる朝首ハ東の方を
の生儀を君命召不俟駕行矣
受の謂く君命召不俟駕行矣
時ハ加馬車の整と先門出を急と跡と
供奉の駕車と義なり急なる非絶の至と

入太廟每事問

入太廟每事問
前見へ

朋友死無所歸曰於我殯

朋友死無所歸曰於我殯
若朋友死して其一族なく遺骸の歸り処なく
ハ義於て見捨る我が家於て殯せしめし
論語五十一

朋友之饋の車馬と雖も祭肉は非ざるは拜せず

朋友の饋とハ死して三日の間ハ棺に入て死せざる如くして膳をとりて人の集會を待てり

寢て尸を不居は容せず

○寢不尸居不容 寢姿ハ慎むべからず人の座に就て多うを弄さざりて見若く者

齊衰の者を見

○見齊衰者雖狎必變見冕者與瞽者雖褻必以貌

雖も必ら

親を人として見れば自を變改て應對せられしなり

凶服の者之を

凶服者式之式負版者 聖人凶服と著せし者

式も負版の者

聖人喪ある人を哀れむし人数を重しめたる

成血饌有ハ必ら

有盛饌必變色而作 饌供を受時ハ

迅雷風烈

必變 鳴雷分て迅く風烈は必ら容を改め冠

車小升は必ら

○升車必正立執綏 車小升の時ハ躬体を正し立て綏を執

車中不内顧不疾言不親指

車中内顧不疾言不親指

色斯舉矣翔而後集

車の中にして左右方を顧みず疾言せず親指せず

色斯舉矣翔而後集

曰山梁雌雉時哉時哉

此段ハ他の文の續いて跡先文章の落字あり此ハこれ鳥と見る者ハ人の氣色を見て飛舉する

路共之三嗅而作

路共之三嗅而作

雌雉

雌雉關々として鳴る故に聖人稱羨して時哉の時哉の物ハ殊に感るるなり

哉子路之

然るに子路之を聞違て聖人之を好むやとてこれを執て共なる元聖人の意あり然らば

論語卷之三終

全氣よなりついで放ちて雉三嗅て飛作

18